

木杯「昭和十二年地方馬検査」

引間 隆文

8月。先の大戦の惨禍により失われた尊い生命に思いを寄せる機会も多いことと思います。あの戦争に巻き込まれたのは、人間ばかりではありません。多くの動物たちも犠牲となりました。



木杯と木箱

旧日本陸軍が「軍用動物」として公認していたのは馬、犬、鳩の三種類でした。中でも馬は、将兵の乗用として、また物資等の輸送用として、かつての戦場では必要不可欠な動物でした。ただ、日本の在来馬は、ヨーロッパ等外国の馬に比べて体格が劣っていました。大河ドラマの板東武者たちは、スラリとした立派な馬で駆けていますが、実際はもっと小柄な馬に乗っていたのです。

日清・日露戦争以降、軍馬の育成は国家的な課題とされ、国産馬の改良が推し進められてきました。農耕馬も軍馬に適するように改良され、軍が毎年行う検査によって選ばれた

馬は、軍馬として徴発されました。

今回ご紹介するのは、軍馬にまつわる朱塗の杯です。見込みには「賞」、口縁には「昭和十二年地方馬検査 帝国馬匹協会」と金字で記されています。

帝国馬匹協会は、大正 15(1926)年に馬事関連の諸団体が結集して創立された団体で、昭和 17(1942)年に日本馬事会に改められるまで、国策に沿った馬の生産や利用を推進してきました。毎年、軍が行う地方馬検査に協賛して飼育や管理に優れた馬の所有者に対する表彰も行っており、当杯もその際の賞品と考えられます。ちなみに当杯が贈られた昭和 12(1937)年には 5,576 名が同協会から表彰されています。

当杯の箱には「昭和十二年九月廿七日来之」「昭和十二年十月七日軍馬ニナリ」「金三百円也」と墨書されており、検査・徴発の期日や代金が分かり貴重です。蓋裏には会津漆器であることを示すシールが遺されていることから、杯の産地も明確です。しかも、この時の賞状も遺されており、馬の名前が「東川号」であったことまで分かります。これらの資料は、軍馬の歴史を示す貴重な資料なのです。

全国で徴発され軍馬となった馬の数は、第二次世界大戦期だけでも 50 万頭とも 100 万頭とも言われていますが、ほとんど帰ってくることはありませんでした。

【参考文献】

埼玉県平和資料館 図録『戦争と動物たち』平成 23(2011)年

日本馬事会『社団法人帝国馬匹協会業績概要』昭和 18(1943)年